

水田は南北に75mの範囲に広がっており、それぞれ畦畔（畦）によって区画されていました。昨年度の調査成果と合わせると24筆程度検出しました。一筆の大きさは12～28㎡で現在の水田と比べると一筆ごとの規模は小さいものです。そしてこの水田は古墳時代前期に起きた洪水により埋没しています。

その後、平安時代になると調査地一帯は条里型地割の方向性に沿った水田開発が行われました。それにより自然堤防などの旧地形は平坦化され、現況に近い方向に区画されていったとみられます。

3. まとめ

これまで井辺遺跡では福飯ヶ峯丘陵裾で、集落や墓域が検出されてきました。それに対して低地部に位置する今回の調査地周辺の様相は判っておらず、湿地か水田であったのではないかと考え

られていました。それが昨年度行われた第34次調査と今回の調査により、やや標高の高い微高地が南北32m幅で北東から南東方向にのびており、そこに弥生時代後期末から集落が形成されたことが判りました。集落の北側に広がる低地には水田が営まれていました。この水田は約1700年前に起きた洪水により埋没し、微高地の集落も古墳時代後期には廃絶してしまうようです。



写真1 1区 水田



写真2 2区 溝11
土器出土状況



写真3 2区 土坑群



写真4 2区 竪穴建物1・2

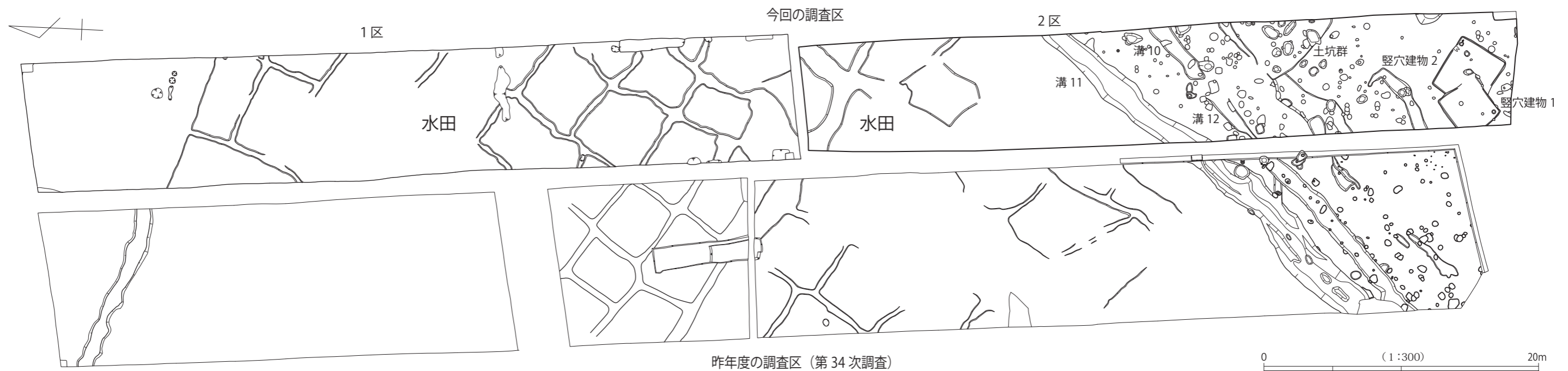


図3 1・2区 遺構平面図